

3歳児における関係づくりを中心にした保育の在り方について

—教育課程の見直しを見据えて—

廣 瀬 三枝子・平 尾 美 香・林 美 代

1. 研究の所在と目的

これまで長く続いたコロナ感染を意識しながらの保育が現在も続いている。その中で、保育の目的や子どもの育ちのどこをどう捉えて大切にするのかを日々の子どもたちの姿から職員間で深く考え合う時間を設けてきた。そして行事においても、まずは中止にせずに実施するならばどうすべきかを話し合い、人数制限や時間配分といった、今まで考えもしなかった当たり前に設定されていた部分を考え直すことから始まった。その制限を考えなければならぬ話し合いが功を奏して、保育の本質の部分となる「何のための行事」なのかを考え合う機会となった。子どもたちが日々最高の笑顔でのびのび遊びに向かう幼児期の育ちを通して、保護者にも行事の在り方の理解を得ようと進めてきた。大人目線の「できる・できない・きれい・上手」等といった評価を意識した行事ではなく、子どもが心を動かして全力で生き生きと自分らしく活動してきたことを見てもらう行事に進化させることを園として目指した。

そこで当園は、子どもたちを真ん中に据えた一人一人のwell-beingを目指した新たな令和の幼児教育という視点を大事にすることとした。そのため、令和になって進化させてきた行事や活動が今後に繋がるように、これまでの記録を元に教育課程を見直していくことが必要となった。

そこには、満3歳児入園の増加により進級児が殆

どとなってきたという事情がある。その背景には、働く母親の増加に伴い満3歳児入園の希望が増えたことがある。そのため新入園児への配慮と共に、満3歳児クラスからの進級児への関わりをどのようにするとよいかという実態に沿った配慮を考えなければならなくなってきた。3歳児4月の段階で進級児が多いため、これまでの3年保育の教育課程と同様では進級児の育ちを捉えきれていないことになる。ここ数年の間に子どもの姿が変わってきた3歳児の教育課程の見直しは急務となった。そのため、昨年度の満3歳児と3歳児クラスの記録および今年度の3歳児クラスの記録を通して教育課程の見直しを試みることにした。

子どもの様子はどのように違うのか。進級児は、進級することで保育室が変わる。環境が変わることは、多くの子どもたちにとっては不安要素になっている。そのため、子どもにとっての不安要素を一つでも排除し、進級当初のストレスの軽減のための方法について話し合ってきた。保育室の配置は安全管理の面からも決められているため、満3歳児クラスの保育室から3歳児クラスの保育室への移動は必須である。これについては変更できないので、他のところで不安を払拭させるために、クラスの友達を変えず、保育者も知っている保育者ができる限り保育を担える体制にしている。4月からの遊びについても、これまで親しんできた遊び環境を保育室に整え、保育室という空間だけが変わるだけで、最小限の不安で済むように配慮している。

一方で新入園児には、初めての学校社会を経験するというハードルがあるため、保護者から離れることが自然とできるような配慮が必要だと考えている。保育室前のウッドデッキに園で飼育しているう

令和5年12月19日受理

連絡先 〒769-0201 香川県綾歌郡宇多津町浜一番丁10番地

香川短期大学 子ども学科

TEL 0877(49)5500 FAX 0877(49)5252

Email fuzoku05@poem.ocn.ne.jp

さぎを置き、餌やりが自然にできるようにしている。また、保育室へ入ることの抵抗感を緩和するために、保育室前のウッドデッキでの遊びを設けたり、保育室の様子を伺いながら園庭での遊びを楽しめたりできるようにしている。自然物、玩具なども工夫し、子どもたちが心を動かすであろう環境を整え、自分から一歩踏み出し「楽しいな」と感じられる場所を見つけられるように、安心できる居場所づくりを意識して環境構成を考えていくようにしている。保育室では、満3歳からの進級児が多いこともあり、初日から遊びを楽しんでいるクラスの友達の様子を見ることで、自然と誘われて新入園児も一緒に遊びに参加していたり、椅子に座ったりと、進級児を真似て園生活に自ら入っていく姿もみられる。クラスの友達と楽しく遊んでいると思っても、急に保護者を思い出して涙ぐむこともあるのが新入園児の姿である。保育者が信頼関係を築きながら、安心して遊びに向かえるように関わり方を個別に配慮していくことがまずは大切と考える。

個別の配慮をした上で子ども主体の保育を考えるには、日々の保育の見直しから全体へと繋げる必要があるだろう。園には、年間指導計画、それに基づき作成される月案、さらに1週間を単位にした週案などがある。子どもの実態や幼稚園の実情に応じてそれらを作成し、それぞれに関連性をもって教育課程の具現化を図っていくことが求められている¹⁾。日々の保育記録を見直し、指導計画を修正し、そこから教育課程を再編するという方向性のもとで取り組みがなされた例²⁾もあるように、教育課程の見直しに当たっては日々の保育記録を大切にしたい。

教育課程を見直すこととなり、3歳児は関係づくりを中心に再編することにした。幼稚園は、初めて出会う保育者や友達と生活する場であるため、個を大切にしながら友達と育ち合う場として捉える必要がある。これは3歳児でも満3歳児でも同様である。育ち合うということは、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の「協同性」とかわりが深い。「協同性」とは、「友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる」³⁾と説明されており、子どもの育つ過程の中で大切にしたいと考えている。

教育課程全体を見直すにあたり、まずは3歳児第Ⅰ期、第Ⅱ期を中心に日々の記録から子どもの姿を捉え直し、指導計画との整合性を図ることとした。3歳児の記録から、関係づくりを基本とした取り組みが、実際にどのように進められてきたのかを子どもの姿と保育者の支援から分析・考察する。そしてその考察から3歳児第Ⅰ期、第Ⅱ期に合わせて作成された指導計画を見直し、3歳児における教育課程の再編に向けた方向性を探っていききたい。

2. 研究の方法

(1) 研究対象

香川短期大学附属幼稚園の園児（3歳児53人：進級児40人、新入園児13人）及び保育に関わる教職員（3歳児担当5名）

(2) 研究方法

- ①指導計画を基に取り組んだ活動について、子どもの様子を観察・記録する。
- ②子どもの様子や保育者の支援について関係づくりを中心に、週のねらいやその日に大切にしたいこと、援助や環境構成のポイントとの関連から保育記録を分析・考察する。
- ③活動の影響（効果や問題点など）を考察する。

3. 保育実践と考察

(1) 居場所づくり・仲間づくり

3歳児クラスには、3歳児入園の子ども（新入園児）と満3歳児入園の子ども（進級児）がいる。そのため、園での経験は異なるが、まだまだ初めての体験も多い。そのことを踏まえて教育課程や指導計画を作成することが求められる。新入園児には安心できる保育者を含めた居場所づくり、進級児には満3歳児クラスでの経験を基にした遊びを通しての仲間づくりが必要である。

そこで、3歳児第Ⅰ期は居場所づくり・仲間づくりを中心に子どもの様子や支援を見ていく。

1) 保育者と親しむ

園生活で「協同性」が育つ基盤は安心感であると

いわれる⁴⁾。そのため、安心して園生活を送るために保育者との関係づくりが求められる。進級児には園生活で親しんだ保育者であるが、新入園児には初めての保育者である。保育者との関係をつくり、安心して園生活を送れるようにしていくことがこの時期に求められている。

【事例1】(2023年4月13日)

週のねらい：新しいクラスでの幼稚園生活や集団生活に友達や先生と一緒に慣れ親しんでいき、楽しい嬉しいなどいろいろな気持ちを味わう。

大切にしたいこと：一人一人の気持ちに寄り添って、安心した気持ちで過ごせるようにする。

援助・環境構成：好きな遊びができるよう、いろいろな玩具を用意したり、一緒に見つけ楽しんだりする。

A児は新入園児であるため、この日が初日である。母親と離れる時は寂しくて大泣きであったが、「ママが見える園庭に遊びに行こう」と保育者と一緒に戸外に行くと、少しずつ気持ちが落ち着いてくる。保育者と一緒に園庭を回っていると、「滑り台したい」「丸太橋できるかな?」「砂場もやりたい」と、どんどん幼稚園でできる遊びが見つかり、笑顔が見られるようになった。A児にとって一番親しみがあるのが母親なので、保育者のことも「ママ、おいで」と呼んで思いを伝えてくる。

まずは幼稚園生活に慣れていくことが必要であるため、週のねらいに「新しいクラスでの幼稚園生活や集団生活に先生や友達と一緒に慣れ親しんで」いくことが含まれている。そのため、その日に大切にしたいこととして「一人一人の気持ちに寄り添って、安心した気持ちで過ごせるようにする」ことを設定している。

A児の姿は、まさに新入園児の姿である。「幼稚園はワクワクする」という思いでやってきたが、「なぜママがいなくなるの?」と母親と離れるのが不安になって泣く。その不安に寄り添うのが保育者

である。保育者も母親と同じように自分の気持ちを受け止めて安心できる相手として認識されるようになっていく必要がある。A児は、戸外でできる楽しそうな遊びを保育者と一緒に見つけていくことで安心感が味わえた。そして馴染みのある「ママ」と呼ぶことで、保育者を安心できる相手と認識したのではないか。保育者との関係が少しずつでき始められると考えられる。

新入園児にとっては初めて尽くしである。その上安心できる保護者もいないそのため「幼稚園って楽しいな、嬉しいな」と思えることを大切にしながら、保育者と一緒に園生活に慣れていけるよう、保育者と親しむ経験が必要である。

【事例2】(2023年4月24日)

週のねらい：友達や先生と様々な活動に参加し、伸び伸びと園生活を楽しむ。

大切にしたいこと：4月生まれの友達をみんなでお祝いして、大きくなったことに喜びを感じる。

援助・環境構成：ケーキのイラストを用意したり、誕生日の歌を歌ったりしてお祝いし、嬉しさを感じられるようにする。

進級児は、戸外でかくれんぼや鬼ごっこで盛り上がり、「かくれんぼをしよう」「鬼ごっこしよう」という声がよく聞こえてくるようになった。

この日はB児（B児は保育所から来た新入園児）、C児、D児、E児、F児でかくれんぼをすることになり、見つける役（オニ）と隠れる役のやりたい方をそれぞれが選んでかくれんぼが始まった。保育者がオニの時は「もういいかい?」「まだだよ」のやり取りを楽しみ、見つかる「きゃ〜!」と言って見つけられたことにも楽しさを感じているようだった。繰り返して遊ぶうちに、10数えてから「もういいかい?」「まだだよ」というやり取りもうまくできるようになり、生き生きとした姿で遊びを楽しんでいた。

この日は4月生まれの子ども4人の誕生会があっ

たので、その日に大切にしたいことや援助・環境構成のポイントが誕生会を中心に作られている。しかし、記録としては子どもたちが楽しんだ内容が中心になるため、週のねらいとの関連から捉えていく。

進級児は、保育者と一緒にルールを感じながら小集団での遊びも楽しめるようになっていく。子どもたちの中から「友達とかくれんぼがしたい」という気持ちが生まれており、自発的に遊びが展開されたのである。決して保育者から「かくれんぼをするよ」という提案をしたわけではない。これは、満3歳児の時に友達を感じ、数人の友達と一緒に遊んだ経験があったからではないか。発達としてはかなり早いように感じるが、満3歳児クラスからの経験がこのような形で子どもたちの姿と結びついているのだろう。

そこに保育所から来た新入園児のB児も遊びに加わった。保育所での集団生活に慣れていたもので、周りの子どもたちに自分から声が掛けられる子どもであった。そこにA児との育ちの違いがある。同じ新入園児と言っても経験の差は大きい。そのような育ちの違い、経験の差も考慮しながら3歳児の計画を立てていく必要がある。子どもたちの経験によっては、ルールのある遊びとの出会いを大切に、子どもたちが保育者と一緒にルールを感じられるような援助も考えておかなければならないのではないかな。

2) 子どものペースで居場所をつくる

保育者と安心できる関係づくりが必要である一方、園における安心できる居場所づくりも必要である。進級児は保育者との関係はある程度築けているが、保育室という安心できる場所が変わってしまったために不安になることがある。そのため、保育室もしくは園内に安心できる居場所を見つけて進級の不安を軽減することも必要であろう。

【事例3】(2023年4月13日)

週のねらい：新しいクラスでの幼稚園生活や集団生活に友達や先生と一緒に慣れ親しんでいき、楽しい嬉しいなどいろいろな気持ちを味わう。

大切にしたいこと：一人一人の気持ちに寄り添っ

て、安心した気持ちで過ごせるようにする。

援助・環境構成：好きな遊びができるよう、いろいろな玩具を用意したり、一緒に見つけ楽しんだりする。

G児は満3歳児クラスからの進級児である。進級当初は保育室が変わった不安から「母親と離れたくない」と泣いていた。日が経つにつれ少しずつ涙の回数も減り、この日の朝は涙を見せずに登園することができた。戸外に遊びに行こうと誘うと「うん」と頷いて園庭を散歩したり、こいのぼりを作ったりしてにこやかな表情をしていた。

しかし、給食の時間が近づくとうとG児とH児は不安になって涙が出てきた。保育者は、2人には給食の時間が泣きたいほど嫌な気持ちなのだろうと受け止め、「わかったよ。泣くのはしんどいから泣かなくても大丈夫だよ」などと言葉掛けをするとうと、少しずつ気持ちが落ち着いた。それでも給食を食べる直前になるとまた不安になっていたのうと、「大好きなうさぎを見に行こう」と誘うと「うん」と少し安心した表情となった。I先生と一緒にうさぎを見に行くと「うさぎさんと（給食を）食べたい」という心の動きになった。そこで、うさぎのゲージの前に簡易のテーブルを用意してうさぎと一緒に食べられるようにすると気持ちが前向きになり、お代わりからは保育室で食べることができた。2人とも自分で食べたいと思って食べられたのうと、嬉しそうで楽しそうな表情であった。

前日が入園式であった。新入園児は慣らし保育のため給食前に降園している。また進級児は新入園児より1週間早いスタートのため、この日が給食初日であった。

G児は、初めてのことが苦手な子どもである。春休み明けは、保育室が変わったことが不安になって「母親と離れたくない」と涙が出ていた。ただ、知っている保育者がいたので、その点は安心できた。保育者に支えられて少し慣れてきたところに、3歳児クラス初の給食の時間となった。

G児、H児ともに食が細いという特徴があり、時

間的にも疲れも出てくるころである。そこに久しぶりの給食、しかも今までとは違う保育室での給食となって不安を感じたようだ。その気持ちは受け止めつつも、保育者には「少しは食べてほしい」という思いもある。2人はうさぎが好きなので、もう一度楽しい気持ちになって給食に向かってほしいという願いが生まれた。だから「うさぎを見に行って気持ちを切り替えられたら給食を食べられるかな」ということでうさぎを見に行くことを提案した。

育ちが少し戻ったようにも見えるが、環境が変わっただけでも戸惑い、不安になる子どももいる。進級当初は不安な気持ちからの立て直しも必要であり、それは成長の過程であろう。保育者との関係から立ち直ることもあるし、新しい居場所ができることで立ち直ることもある。この2人にとっては、保育室よりもうさぎの前が居場所だったようだ。子どもの気持ちを受け止め、子どものペースで乗り越えていけるように安心できる居場所づくりの援助をすることも必要ではないだろうか。

3) スポーツレクに向けて

スポーツレクは、新入園児にとっては初めての大きな行事である。入園してすぐに行事に向けて動き出すため、保育者や友達との関係の中で安心できるように配慮することが求められるであろう。

新入園児は、進級児たちが4月当初から魅力的な遊びを楽しむ様子を見てきている。園庭には、スポーツレクに向けて5歳児が音楽に合わせて踊る姿やリレーを楽しむ姿がある。その姿に心を動かされて踊りを真似たり、かけっこしたりを入園間もない時期から、保育者や友達と楽しんでいる。その楽しむ姿を保護者にもスポーツレクの間を通して共有したいと考えている。そのため、スポーツレクの内容は親子でのふれあいを中心にし、保育者や友達と一緒に楽しんできた内容（かけっこや踊り）を取り入れるようにしている。そのことで子どもたちの心の安定を図りながら、成長を感じたり園生活への安心感に繋がったりできるようにと考えている。

【事例4】(2023年5月15日)

週のねらい：友達や先生とかけっこやダンスを楽しみ、走る気持ちよさや音に合わせて踊る楽しさを味わい、意欲的に参加する。

大切にしたいこと：①音楽に合わせて踊ることを楽しむ。

②一人一人がしたい遊びを見つけて遊びを楽しむ。

援助・環境構成：子どもたちと一緒に踊りを楽しみ、踊ることへの興味関心を高められるようにする。

C児、E児、G児、H児の4人は、かけっこのスタートラインから「よ～い、どん」で保育者めがけて走りきることを楽しんでいた。「もう1回」「もう1回」と、保育者に抱き着いてはスタートラインに戻りまた走ってきて抱き着いて、を繰り返す。少しずつ走る勢いもついてきて、保育者が後ろに倒れると、それからは走る目的が保育者を倒すことになってしまった。

3歳児のかけっこは、ゴール（保育者のいる場所）にたどり着くことが目的である。そのために保育者がゴール地点となって待っている。そこにたどり着くと、タッチしたり抱き着いたりしてふれあいながら、ゴールした喜びを味わえるようにしている。

当初は走ることの楽しさ、ゴールすることの喜びを感じられるようにするための取り組みであったが、途中で目的が変わってしまった。しかし、遊びを繰り返す中で友達とふれあい、友達の真似をしたり力を合わせたりすることで友達を感じられる活動となったのではないか。このような友達と一緒に行う楽しい経験が、集団活動への意欲に繋がっていくと思われる。

【事例5】(2023年5月16日)

週のねらい：友達や先生とかけっこやダンスを楽しみ、走る気持ちよさや音に合わせて踊る楽しさを味わい、意欲的に参加する。

大切にしたいこと：友達や先生と一緒に運動会
ごっこに参加し、体を動かす
楽しさを友達や先生と共有す
る。

援助・環境構成：1つ1つの活動を意欲的に楽し
めるよう、活動内容に見通しを
もてる言葉掛けを行い、一緒に
楽しんでいく。

この日は、体操、かけっこ、ダンス、バルーン
といつもより少し長めの「運動会ごっこ」（スポー
ツレクの練習）だったので、園庭に行く前に「①
体操、②かけっこ、…」と見通しが持てるように
伝えた。子どもたちは「わかった、頑張る！」「え
いえいお～！」と力をためてから園庭に向かっ
た。

バルーンをみんなで揺らすとパタパタと風にな
びき、「せ～の！」と力を合わせて上にあげると
風が入ってふわっと浮く。その度に子どもたちは
「うわ～！」と歓声を上げながら楽しんでいた。

バルーンは子どもたちにとって魅力的な教具であ
る。明るいい色なので、3歳児は手に持てみたいと
いう気持ちになる。「持ってみよう」と言葉を掛け
ると子どもたちは嬉しそうに集まってくる。一緒に
動かして同じタイミングで遊ぶことを楽しめ、上げ
下げの中で自然と風が生まれ、バルーンを使って
様々な動きを楽しむことも可能である。一つのバ
ルーンを使って保育者や友達と同じ動きを感じること
ができるのである。それでいてダイナミックな動
きとなるので、楽しい気持ちを共有できる。だから
年少のバルーンは「技を決めること」が目的ではな
く、友達や保育者と同じ動きを感じることが目的と
なる。

ただし、この時期に3歳児でバルーンが楽しめる
のは、半数以上が進級児だからではないか。保育者
が両サイドに新入園児を連れたら一緒に活動ができ
るのである。それは、進級児たちが集団生活の中で
一斉に動作する（手を挙げる、立つ、座るなど）こ
とを経験してきているからであろう。

【事例6】（2023年5月25日）

週のねらい：①友達や先生と体を動かす楽しさ
や、春の自然や虫に触れ、季節を
感じながら過ごす。

②運動会を通して走ることや踊る
ことの楽しさや、ゴールまで走り
切る喜びや心地よさを感じるとと
もに、親子での触れ合いも楽しみ
ながら、友達や先生、お家の人と
一緒に体を動かす楽しさを味わう。

大切にしたいこと：友達や先生、そしてお家の
人と一緒に体を動かす楽し
さを味わう。

援助・環境構成：見通しを持って活動を楽しめ
るように配慮しながら、安心
して1つ1つの競技にそれぞ
れが自分の力を発揮できるよ
うにする。

スポーツレク当日。前日の帰りの集いで「明
日は嬉しい、楽しい、面白い運動会にしよう」と
話し、「にこにこ笑顔」を合言葉にしていた。朝
の集いでは「楽しい運動会」「かっこいい運動会」
と子どもたちの中から前向きな言葉がたくさん
出てきた。

園庭に出ると家族がたくさん来てくれており、
自分の家族に手を振るなど嬉しそうにしていた。
いつもと少し違う雰囲気にとドキドキして、動き
が固くなったり固まってしまったりする子ども
もいた。しかし、かけっこのゴール付近に家族
がいたことで安心してゴールまで走れたり、お
んぶりレーや親子ダンスなどを楽しんだりする
ことができた。

子どもたちにとっては、3歳児クラスでの初めて
の大きな行事であるが、「運動会ごっこ」という遊
びの続きである。その意識を普段から大切にしてき
た。普段の遊びとは違う点が雰囲気であり、周りに
家族がいることである。普段の遊びとは少し違うの
で不安になる子どももいるが、遊びとして楽しんで
きた内容なので、この日に大切にしたいこととして
「お家の人と一緒に体を動かす楽しさ」とあるよう

に保護者の力を借りながら楽しむことを目指した。子どもたちは、家族と一緒に競技することで不安の中にも楽しさが生まれたようだった。

もう一方で、行事を通して保護者にも子どもの姿を見て安心してもらいたいということがある。年に一度なので行事を通して子どもの成長を感じ、家族の中で成長を喜び合える機会である。また保育者とも同じ気持ちを共有できる。そのために子どもへの評価が「できる・できない」で行われていないということを保護者が実感でき、伸び伸び遊ぶ姿から安心する、ホッとする機会としての行事を常に心がけている。保護者に「できる・できない」以外の評価を受けることで子どもの自信になり、子どもの中に「幼稚園がもっと好きになった、もっと楽しくなった」という気持ちが生まれてくるだろう。その気持ちが保護者に伝わることで、「子どもに幼稚園という居場所ができ、自分（保護者）から離れて保育者や友達と楽しんでいる」、「行事では子どもとふれあえ、自分（保護者）も楽しい」と安心できるだろう。そして保護者も楽しいと感じていることが子どもに伝わることで、子どもも安心して集団活動に向かっていけるのではないかと。

（２）好きな遊びを見つけて楽しむ

第Ⅱ期は、第Ⅰ期の居場所づくり・仲間作りを基に好きな遊びを見つけて楽しんでいく時期だと考えている。「楽しい・面白い・またやりたい」という気持ちを大切にしながら、好きな遊びを見つけて友達との関わりを求めていくことをねらっている。

そこで、好きな遊びを見つけていく子どもの様子やそのための支援について考えていく。

１）ルールのある遊び

生活の中にきまりやルールが存在する。登園したら荷物を片付けて帽子やタオルを吊る、食前・食後に挨拶をするなどの慣習的なものには、日々の生活の中で慣れている。遊びの中にも簡単なルールが存在し、オニに捕まらないように逃げる、捕まったらオニを代わるなどの遊びを、保育者と一緒に楽しめるようになってきている。

３歳児の子ども達が保育者と一緒に簡単なルールを理解し、小集団で遊ぶ様子を見ていく。

【事例 7】（2023年 6 月 8 日）

週のねらい：友達や先生と過ごす中で、自分の好きな遊びを十分に楽しむ。

大切にしたいこと：時計の制作を取り入れ、数字に興味を示したり、時間を感じたりしながら一緒に楽しむ。

援助・環境構成：時計に興味をもてる絵本を置いたり、折り紙や紙コップなどで作れる時計づくりを楽しめるコーナーを用意したりする。

クラスの子どもの多くが「おおかみさん今何時？」の遊びに夢中になっている。５歳児と一緒に遊んでいた時、オオカミ役と逃げる役の区別がつかなくなり、オオカミ役同士で捕まえるトラブルが起きた。「オオカミさんかどうか分からないね。どうしようか？」と子どもたちと相談していると、５歳児が「帽子の色を変えたらどう？」と提案してくれた。そこでオオカミ役は白（他のクラスの子どもも帽子を白く出来るから）、逃げる役はクラスカラーにすることにして再度スタートした。役割の区別が付きやすくなり、遊びが盛り上がっていった。

満３歳児クラスの時に保育者が用意した折り紙の腕時計を楽しんだ経験がある子どもが半数近くおり、時計に興味を持っていた。「時の記念日」を見据えて、制作活動として時計づくりが保育環境としてこの時期に用意されている。しかし、記録としての遊びは「おおかみさん今何時？」だったので、週のねらいである「好きな遊びを十分に楽しむ」という観点からみていく。

ほとんどが進級児なので、小集団で遊ぶことについて慣れている。スポーツレクの後なので、特に友達を感じられるようになってきており、友達と一緒に好きな遊びを楽しむことができるようになってきているようだ。

オオカミが出てくる絵本などを契機に始まった「おおかみさん今何時？」の遊びに、この日は５歳児が加わった。満３歳児の時から、声をかけてくれ

たり手を繋いでくれたりすることが日常だった5歳児なので、どちらも抵抗なく遊べる関係ができています。遊びの中で3歳児のオオカミ役同士が捕まえ合うトラブルが発生した。子どもたちのトラブルの間に保育者が入り、5歳児と3歳児を繋いで仲間として遊べる関係を築こうとしている。トラブルの解決方法を5歳児から提案してもらい、楽しかった遊びがさらに楽しく魅力的なものとなっていった。

幼児期は、「多くの友達と関わりながら遊ぶことを通して、ルールを守り、自我を抑制し、コミュニケーションを取り合いながら協調・協同すること」⁵⁾を学んでいくといわれる。同じ遊びをしたい子ども達が集まった小集団で遊ぶ時には、何かしらのきまりやルールが無意識的に生じてくる。その無意識的なルールが楽しいと思い、従おうとしていくのではないか。たまたまこの遊びに5歳児が加わっていたが、3歳児は5歳児がスポーツレクの練習をする姿をずっと見ていた経緯があり、心を動かされて真似して踊ってみたい、応援したりするなど、憧れを抱いていた。その憧れた5歳児から提案されたルールなので、余計に盛り上がったのかもしれない。

【事例8】(2023年7月4日)

週のねらい：水や泥・泡などの感触を味わい、心地よさを感じながら友達や先生と楽しむ。

大切にしたいこと：水の冷たさや感触に心地よさを感じながら、夏ならではの遊びを楽しむ。

援助・環境構成：子どもたちが安全に安心して楽しめるように、温度、鹽やおもちゃの数などに配慮して環境を整える。

帰りの集いの際には、名前リレーを行っている。子どもたちにも定着し始め、保育者がいなくても子どもたちが順番に名前を呼び合うことができるようになっていく。保育者が名前を呼ぶように一人一人の名前を呼び、名前を呼ばれた子どもは「はい」と生き生きとした声で答えている。

7月なので、水遊びや泥遊びが活動の中心になってくる。少しずつ水に慣れながら、終業式前に大きなプールで遊べるように段階を踏んで水遊びをしている時期である。

名前リレーは、「新しい友達の名前を覚えよう」から始まった活動である。「○○ちゃん」「はい」のやり取りで、自分の名前を呼ばれる嬉しさを感じる。また、友達同士で名前を呼び合うことで親しみを感じている。4月から行ってきたことで、子どもの中に名前リレーのルールが定着している。そのため、保育者がいなくても同じように始められるようになっていた。子どもにとっては、毎日保育者と行っていた好きな遊びの再現だったのだろう。小集団で同じ気持ちを共有して「先生の真似遊び」として再現しながら、仲間を感じていたことだろう。

2) 水遊びに向けて

指導計画において、季節の遊びを考えることは必須である。6月・7月は、水遊び・泥遊びの時期である。新入園児には初めての水遊び・泥遊びの時期となる。一方、進級児は入園時期によってその経験が異なる。

3歳児になって初めてとなる水遊びの経験が、大きなプールにみんなで入ることである。大きなプールとの出会いをどのようにするかがこの時期の課題である。園では、恐怖心緩和のためまずは芝生の園庭に前年度に親しんだビニールプールや鹽を準備して、水遊びを楽しむことから始めている。そして、近くの大きなプールで5歳児や4歳児が遊んでいる姿が自然と見えるようにし、楽しそうに感じたり、入りたい気持ちが持てる機会にしたりしている。子どもたちが大きなプールに憧れを抱いていく姿を保育者が感じ、子どもたちが水に慣れて楽しめるようになり、大きなプールで遊ぶ遊び方や意味を理解してきた時に、大きなプールでの水遊びを開始したいと思っている。

そこで、大きなプールでの水遊びまでの過程を見ていく。

【事例9】(2023年6月13日)

週のねらい：友達や先生と一緒に、水の冷たさに心地よさを感じたり水の感触を味わったりしながら、水遊びを楽しむ。

大切にしたいこと：水の冷たさや感触に心地よさを感じながら、水遊びを楽しむ。

援助・環境構成：安全に水遊びを楽しめるように、ルールや約束事を子どもたちと交わし、一緒に水に触れ感触を楽しんだり心地よさを感じたりする。

初めての水遊びの日。「今日、いつ水遊びするの？」と朝からワクワクした気持ちの子どももいた。水着に着替え、「つながれわっしょい」を踊って準備体操とした。

その後、園庭に出ると大きなビニールプールや皿、水鉄砲、宝石や魚などの玩具にウキウキしていた。水鉄砲で水を飛ばす楽しさを感じたり、友達と水の掛け合いをすることで水の冷たさを感じたり、容器を押すと出てくる水の流れをじっと観察したりと、それぞれの楽しみ方で今年初めての水遊びをしていた。

【事例10】(2023年6月16日)

週のねらい：友達や先生と一緒に、水の冷たさに心地よさを感じたり水の感触を味わったりしながら、水遊びを楽しむ。

大切にしたいこと：水の感触に親しみ、水遊びの楽しさを味わう。

援助・環境構成：週末なので、水遊びの時間配分に配慮しながら、水の心地よさや感触を楽しめるようにする。

水遊びに意欲的な姿が増え、着替えや身支度も自分でやり進める子どもが多くなった。着替えの手順も少しずつ覚え、着替えができたなら椅子で待つことができるようになった。

水遊びでは、友達同士で水を掛け合うことを楽

しんだ。容器の蓋を外して掛け合うことが多く、水を飛ばすというよりも保育者や友達を濡らすことが楽しいようだった。J児とK児はペットボトルシャワーに水を汲み、水の流れを楽しんでいた。K児が主に水を汲み入れる役割を担い、一緒に水の流れを楽しもうとしていた。

【事例11】(2023年7月13日)

週のねらい：水や絵の具、泥、水などいろいろな感触を先生や友達と一緒に楽しむことで夏ならではの遊びに興味関心をもつ。

大切にしたいこと：プールに入る時間をみんなで共有し、プール遊びとの出会いを喜び、安全に楽しむ。

援助・環境構成：約束事を子どもたちと確認したり、苦手な子どもには皿を用意したりして、子どもたちそれぞれが楽しさを感じられるようにする。

大きなプールに入る初めての日。ドキドキしながらプールへ行くと、大きいくさん水が入っているのを感じて「ここに入れるの？」とワクワクしている様子だった。手で水をすくって胸や頭にかけ、バタ足をし、少しずつ潜ってみながら水の冷たさに慣れていった。その後、魚や宝石、水鉄砲など子どもたちの好きな遊びを用意し、自由な時間を楽しんだ。

6月・7月なると、週のねらいとして水遊びに関するものが必ずと言っていいほど入ってくる。大きいプールとの出会いに向けて、前年度に親しんだビニールプールや皿、水鉄砲などでの水遊びから始めた。時期的に5月が暑く芝生のミストが5月末から稼働しており、水に触ると気持ちいいという体験もあった。その体験もあり、「水遊びを早くしたい」という思いも強かったことも、水遊びへの意欲付けになったことだろう。

ビニールプールの中に魚や宝石など、いくつか子

どもが選んで遊べる玩具も用意し、水遊びが楽しくなるように工夫した。そこには、穴の開いたペットボトルシャワー、マヨネーズの空き容器などの廃材もあり、友達や保育者との触れ合いの中で、水の不思議さに興味をもったり、廃材・玩具の特性を知って遊びに利用したりと、子どもが考えて遊ぶこともできる。それが今後の育ちに繋がっていくと考えられる。

何度か水遊びを経験すると、着替えて待つ、一緒に移動する、順番にシャワーを浴びてプールの周りで待つ、という手順を通してルールを理解も進んでくる。終わった後も水着を脱いでシャワーを浴びる、タオルを巻いて椅子で待つ、全員揃ったら歩いて保育室に戻る、という手順がある。子どもにとっては少し長い手順ではあるが、楽しいからできるという面もあるし、友達と声を掛け合いながら考えてできるという面もある。このような環境の中で自然と集団での活動にも慣れていっているのが分かる。

段階を踏みながら最後に大きなプールに入れた嬉しさや満足感が子どもたちから伝わってくる。もちろん水が苦手な子どももいるだろうが、水鉄砲、魚や宝石など水遊びで楽しんだものを用意したことで、安心してやってみようと思えたのではないかな。計画として子どもの様子を考えることは重要である。

4. まとめ

ここまで、3歳児第Ⅰ期、第Ⅱ期を中心に日々の記録から子どもの姿を捉え直してきた。集団活動の経験のある進級児が多いことで、新入園児でも進級児の真似をしながら遊ぼうとしている姿が多く見られた。同年齢の友達の姿を見ることで、「私もやってみたい」「同じようにできるかな？」という思いが先に出て、初めての経験であるブランコや三輪車での遊びさえ自然に展開されている。園での遊び方を友達の姿を見ながら学ぶことで、当然のこととして身に付けていくのであろう。

もちろん、初めてのことに不安になる子どももある。新入園児だけでなく、進級児にも当てはまる。そのためどちらの子どもにも保育者に親しむ時間、子どもの居場所をつくることも必要になる。そ

れらから生まれる安心感から、子どもたちは好きなものを見付けて遊びを楽しめるようになる。だからこそ、3歳児クラスでは「安定感をもち幼稚園で過ごす」⁶⁾「教師に親しみをもつ」⁷⁾が第Ⅰ期のねらいに、「園生活の中で好きなものを見付けて過ごす」⁸⁾などが第Ⅱ期のねらいになってくるのだろう。

3歳児クラスの始まりは、新入園児と進級児の集団活動の経験の差から指導計画・教育課程でそれぞれの配慮が必要である。第Ⅱ期も、まだ集団での遊びの経験や水遊びなどの季節の遊びの経験の差がある。新入園児が進級児の真似をして楽しんでいる遊びを保育者としては止めることはないが、安全面やルールについての経験が1年近く違うので、その点での配慮が必要である。指導計画・教育課程において、そのことを明記していかなければならないだろう。

9月は、初めての長期休み(夏休み)明けのためそれぞれに対する配慮が引き続き必要であるが、その後「楽しいな」の気持ちが重なり、様々な体験を通して10月後半には同様の育ちが見えてくる。この時期には、保育者の中に「新入園児・進級児」という意識はほとんどなくなってしまっている。これらを受けて第Ⅲ期では、「みんなと遊ぶのが楽しいな」という気持ちを大切にしながら過ごせるように計画を考えていく必要があるだろう。既にルールのある遊びを体験しているところはあるが、新入園児も含めて簡単なルールのある遊びを経験し、友達と遊ぶ楽しさをじっくり味わうことを目指したい。体を動かす遊びや運動、特にルールのある遊びやスポーツなどは、社会性を育てる契機を与えてくれるといわれる⁹⁾。少しずつ集団でできる遊びを取り入れながら、育ちの違いがあっても、すべて子どもが心を動かしたところを大事にして、指導計画、ゆくゆくは教育課程を編成していきたい。

なお、本研究に協力いただいた香川短期大学附属幼稚園の全ての関係者の皆様にこの場をお借りして感謝とお礼を申し上げたい。

註

- 1) 文部科学省(2021)「幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開」

https://www.mext.go.jp/content/20210301-mxt_youji-000013093_01.pdf (2023/11/27)

- 2) 玉瀬友美・中山美香・鎌倉正子・岡谷里香・矢田崇洋・青木佐樹・藤戸綾香 (2021) 「幼稚園における教育課程の再編成—高知大学教育学部附属幼稚園での取り組み—」『高知大学教育学部研究報告』81, pp.55-65
- 3) 文部科学省 (2017) 『幼稚園教育要領』フレーベル館, p.6
- 4) 無藤隆 (2018) 『10の姿プラス5・実践解説書』ひかりのくに, p.22
- 5) 文部科学省 (2012) 「幼児期運動指針ガイドブック」
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/sports/detail/__icsFiles/afieldfile/2012/05/11/1319748_5_1.pdf (2023/11/27)
- 6) 小久保篤子「幼稚園教育における資質・能力の育成に向けた教育活動の充実」文部科学省『初等教育資料』1009, p.9
- 7) 同上
- 8) 同上
- 9) 前掲5)

